

女子大生における友人関係のとり方、ソーシャルスキルと 居場所感の関連について

The relationship between friendship, social skills and sense of “ibasyo” in female university students

須藤 優希
Yuki Suto

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：友人関係, ソーシャルスキル, 居場所感, 女子大生

Key words : Friendship, Social skills, Sense of “ibasyo”, Female college students

1. 研究目的

1980年代, 不登校が増加したことで, 文科省は不登校に対する取り組みを本格化させた. 同時に, 不登校対策の一環として「居場所」という概念が注目されるようになった(石本, 2009). 則定(2008)は「居場所」の中でも心理的な側面に注目し, 「心理的居場所」という言葉を提示し, 心理的居場所を「こころの拠り所となる関係性, および, 安心感があり, ありのままの自分が受容される場」と定義し, 心理的居場所があることに伴う感情を「心理的居場所感」とした. 「心理的居場所感」は, 「ありのままの自分でいられる」などの「本来感」, 「役に立っている」などの「役割感」, 「無条件に愛されている」などの「被受容感」, 「ホッとする」などの「安心感」の4つから構成されているとした(則定, 2007). 居場所は研究によって個人の場所も居場所とする場合, 対人関係を居場所とする場合があるが, 大学生は「心の居場所」として挙げるのは, 「場所」よりも「対人関係」であり, 対人関係の中でも「友人」が多いこと(小畑・伊藤, 2001), 友人への居場所感は大学生におけるアパシーを軽減させたり(石本・倉澤, 2009), 自己肯定意識(石本, 2010)と正の相関がみられることを明らかになっている. このことから, 大学生は友人といふところを居場所と感じ, 大学生の友人における居場所感は, 心理的適応と関連が見られることがわかる. 石本・西中(2016)は, 居場所がないという感覚である「居場所欠乏感」と友人関係のとり方の関連を調査すると, 友人への同調性が低く心理的距離も遠い友人関係は居場所欠乏感が高く, 同調性が高く心理的距離も近い友人関係

をとる人, 同調性は低い心理的距離が近い友人関係をとる人は居場所欠乏感が低いことが明らかとなった. 「居場所がある感覚」である居場所感もまた友人関係のとり方と関連が見られることが考えられる. そこで今回は, 大学生の対人関係, 特に友人関係に焦点を当てて研究を行う.

友人関係と居場所感の関連について調査した研究に永井(2018)がある. 永井(2018)は友人関係において傷つきを避ける傾向とソーシャルスキルでクラスタ分析を行い, 5つのクラスタに分けた. そしてそれぞれの群で居場所感との関連を見た結果, 「スキル成熟傷つき回避群」と「スキル成熟親密関係群」が居場所感が高かった. このことから, ソーシャルスキルも居場所感と関連がみられることが明らかとなった. 永井(2018)では居場所感の形成を, 傷つけあい回避という力動的要因とソーシャルスキルという関係形成のプロセスから説明しようとしていると言えよう. しかし, 永井(2018)では, 居場所感のどの側面が高いのかについて明らかにされていない. 居場所感にはいくつかの側面があり, 「居場所感が低い」と感じている人でもどの側面が低いかが異なっていることが推測される. 対人関係を築く上でソーシャルスキルは高いことが良いとされるがその一方で, 自分を抑え過ぎることによって安心感や本来感を低下させるのではないだろうか. そこで本研究では, 居場所感の下位側面に焦点を当て, 友人関係のとり方とソーシャルスキルとの関連を調べることを目的とし, 以下の仮説を立てた.

仮説1 : 傷つけあい回避傾向が高いほど, 居場所感の「本来感」「安心感」に負の影響を与え, ソー

シャルスキルが備わっているほど「役割感」「被受容感」に正の影響を与えるだろう。

仮説 2 : 「ソーシャルスキルが低く, 傷つけ合うことを避ける傾向が低く 距離をとる群」は他の群よりも居場所感のすべての側面が低いだろう。

<ソーシャルスキルと傷つけ合うことを避ける傾向がともに高い場合>

仮説 3 : 「ソーシャルスキルが高く, 傷つけ合うことを避ける傾向が高い群」は, 「ソーシャルスキルが低く, 傷つけ合うことを避ける傾向が高い群」よりも居場所感の全ての側面が高いだろう。

<ソーシャルスキルが高く, 傷つけ合うことを避ける傾向が低い場合>

仮説 4 : 「ソーシャルスキルが高く, 傷つけ合うことを避ける傾向が低い群」は, 「ソーシャルスキルが高く, 傷つけ合うことを避ける傾向が高い群」よりも居場所感の「安心感」「本来感」が高くなるだろう。

仮説 5 : 「ソーシャルスキルが高く, 傷つけ合うことを避ける傾向が低い群」は「ソーシャルスキルが低く, 傷つけ合うことを避ける傾向が低い群」と「ソーシャルスキルが低く, 傷つけ合うことを避ける傾向が高い群」よりも居場所感のすべての側面が高いだろう。

2. 研究実施内容

2-1 方法

調査期間: 10月1日~12月6日

調査対象者: A大学の女子大学生, 大学院生 170名 (有効回答数 149名, 平均年齢: 20.86±0.89歳)

調査方法: 質問紙法で行った。質問紙構成は次の通りである。①表紙, ②心理的居場所感尺度 (則定, 2007) ③傷つけ合い回避尺度 (岡田, 2012) ④成人用ソーシャルスキル自己評定尺度 (相川・藤田, 2005) ⑤フェイスシート (年齢, 学年)

2-2 結果

2-2-1 居場所感尺度因子分析結果

因子分析の結果, 「安心感・本来感」「役割感・被受容感」の2因子構造が妥当と判断された。仮説は「安心感」「本来感」「役割感」「被受容感」で立てたが, 以下, 「安心感・本来感」「役割感・被受容感」として検討する。

2-2-2 傷つけ合うことを避ける友人関係, ソーシャルスキルと居場所感の重回帰分析結果

傷つけ合うことをさける友人関係とソーシャルスキルを説明変数, 居場所感の下位尺度を目的変数とした重回帰分析を行った。結果を図1, 2に記す。居場所感の「安心感・本来感」は傷つけ合うことをさける友人関係が負の影響を, ソーシャルスキルが正の影響を与えていた。対して, 「役割感・本来感」はソーシャルスキルのみ正の影響を与えていた。

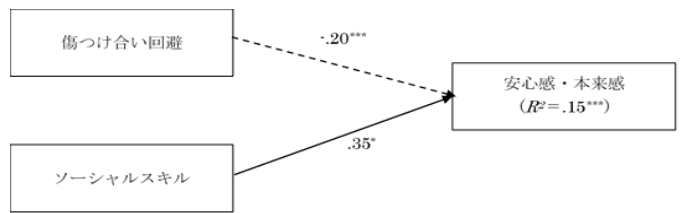


図1 友人関係, ソーシャルスキルと居場所感の安心感・本来感の重回帰分析結果

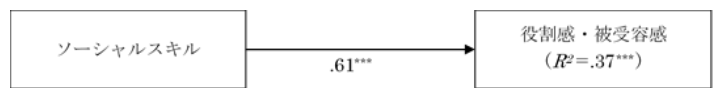


図2 友人関係, ソーシャルスキルと居場所感の役割感・被受容感の重回帰分析結果

2-2-3 友人関係・ソーシャルスキルクラスと居場所感の分散分析結果

分散分析を行う前に, 調査対象者の友人関係とソーシャルスキルの持ち方にどのような特徴があるのかを明らかにするために ward 法によるクラス分析を行った。その結果, 3クラスが妥当と判断された。次にクラスの特徴を明らかにするため, クラスを独立変数, 友人関係とソーシャルスキルを従属変数とした分散分析を行った結果を表1に示す。

表1 クラス分析結果

	クラス1 スキル成熟 傷つけ合い回避群 (n=66)		クラス2 スキル成熟 他者配慮親密群 (n=36)		クラス3 スキル標準 傷つけ無関心群 (n=43)		F値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
傷つけ回避	4.29	0.42	4.16	0.50	3.64	0.65	21.84 ***	1,2>3
表面的対応	3.69	0.46	2.42	0.51	2.79	0.56	85.61 ***	1>3>2
傷つけられ回避	3.71	0.58	2.27	0.54	3.08	0.64	70.92 ***	1>3>2
気遣い	4.48	0.43	4.47	0.57	3.70	0.42	41.57 ***	1,2>3
ソーシャルスキル	2.73	0.36	2.77	0.39	2.59	0.32	2.85 †	2>3

クラス分析で得られた友人関係とソーシャル

スキルの3クラスを独立変数、居場所感を従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果、ソーシャルスキルが高く、他者に配慮し親密な関係を築く「スキル成熟他者配慮親密関係群」の居場所感が高くなることが明らかとなった。結果を表2に示す。

表2 分散分析結果

	クラス1 スキル成熟 傷つけ合い回避群			クラス2 スキル成熟 他者配慮親密関係群			クラス3 スキル標準 傷つけ無関心群			多重比較
	n	M	SD	n	M	SD	n	M	SD	
安心感・本来感	65	3.91	0.77	36	4.58	0.36	42	3.92	0.83	2>3,1
役割感・被受容感	65	3.48	0.76	36	4.03	0.81	43	3.31	0.96	2>1,3

3. まとめと今後の課題

本研究によって、ソーシャルスキルが高いことで居場所感の安心感や本来感、役割感・被受容感が高まることが明らかとなった。加えて安心感・本来感は、親密な友人関係を築くことで高まることも明らかとなった。また、ソーシャルスキルが高く、友人に対して配慮しつつも傷つけられることを恐れず親密な関係を築く人は、居場所感の全ての側面が高いことが明らかとなった。対して、ソーシャルスキルが高く自他ともに傷つけられることを回避しようとする人、ソーシャルスキルが平均的で傷つけられることを回避しようとする人は友人に対しての居場所感が同等であることが明らかとなった。この点から、ソーシャルスキルが高い群同士では表面的でなく親密な友人関係を築くことによって友人への居場所感を高めることが明らかとなった。ただし本研究では、クラス間間のソーシャルスキルが有意傾向であることを考慮する必要がある。

以上のことから、ソーシャルスキルが高いだけでは居場所感が高まらず、親密な友人関係が居場所感を高めるうえで必要となることが示唆された。居場所づくりを行う上で、居場所感をより高めるには、表面的に対応する友人関係に焦点を当てて、介入することが必要であることが推測された。傷つけ合い回避群、傷つけ無関心群については、個人であれ集団であれ心理療法的な接近が必要になると思われる。

本研究では、調査対象者の居場所感の安心感・本来感が高かった。本研究の対象者は成人であることから、20歳となってくると友人への居場所感のうち安心感・本来感が高くなっていることが推測された。そのため今後は、思春期や青年前期との比較を行い、年代での違いや本来感・安心感が低い群でも本研究と同様な結果となるのか検討する必要があると考えられる。

主要参考文献

- [1] 永井暁行 (2018) . ソーシャルスキルと態度による大学生の友人との付き合い方の分類—友人関係による居場所感の違い— 教育心理学研究, 66, 54-66.

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所2019年度大学院生研究助成 (B) (課題番号: DB1911) より研究助成を受け行った。